

春燈

2019 October

10月号



主宰の句

安立公彦

一すぢの灯明り胸に夏は逝く

朝々の荔枝のみどり風を呼ぶ

桔梗の紫さやに夕爾の忌

星飛ぶや戦に果てし兄のこゑ

終戦日父ははの手の思ひかな



成瀬櫻桃子の句

数珠玉や不器用なりし父の愛

「素心以後」昭和五十五年

生後十ヶ月で母に連れられ家を出た櫻桃子は、父との記憶のないまま成長し、十六歳で父と再会する。

父との空白を埋める為、一緒に酒を酌む事もあったようだ。父を見送ったのは四十六歳のとき、それ以降父の句が詠まれるようになる。掲句、葉裏で頑に光を放つ数珠玉に、父の姿を見たのであろうか。自身も親となり障害を持つ娘・美菜子への愛とも取れる。

持田信子

成瀬櫻桃子の句

首つよく振つてタンゴや聖夜の灯

「素心以後」平成八年

先生の句集の中で珍しい一句に出会いました。

何かの折に先生の奥様がダンスを嗜んでいらつしやる
と伺い、同じ趣味を持つ者として、親しみを覚えたもの
でした。この句は多分聖夜の奥様の踊りを鑑賞なさつて
のものと拝察致しました。

先生の温かな目差と、タンゴの特長の一瞬の首の動き
を見落とさぬ鋭い観察眼に感服致しました。

大西由美子

燈下集



○ 本田 保

上水の水嵩増しぬ桜桃忌

芥川賞取れずとも良し桜桃忌

羅やひとつも嫌な顔みせず

梅雨寒の熱きうどんをすすりけり

午前四時夏至の街灯消されけり

○ 瀬戸 峰子

月見草ヘッドライトに浮かびけり

街灯の及ばぬ先に月見草

丈伸びる宵待草の群れ咲くや

朝な朝な朝顔の花数へけり

まさに今縊り解かんとす牽牛花

○ 今井 弘雄

雨上がる夕暮の街凌霏花

故里の夏の夜空や七つ星

せせらぎの水音つまづく初蛸

青春はテネシーワルツ青胡桃

水打つて夕暮の風呼びにけり

○ 吉川 隆

子の頃の唱歌懐かし夏は来ぬ

舟屋より舟の出て行く時鳥(伊根)

公平に餌貰ひしや燕の子

単線のホーム素通し夏つばめ

野にあればどの夏草も嫌はれず

○ 清水美子

大川の灯影涼しき屋形舟
天空の竜の墨絵や暑を滅す
烏団扇お初穂料を握り締め
ねだられてすもも祭の量り売り
今生の二人の出合ひ立て版古

○ 片山博介

知恵の輪の茅の輪くぐりてはづれたり
在五忌や朝市に買ふ忘草
溪流のしづき酒杯に夏料理
たましひのしばし戻らず昼寝覚
夕焼の褪むればいよよ笛と鉦

○ 府川昭子

蚊遣香闇夜に届く波の音
祭来る皿にパセリと紅生姜
裏庭のてらてら椿に祭来る
風に聴き風止んで聴く河鹿かな
のうぜんの雨を求めて咲きのぼる

○ 永島雅子

子のひらく手に蹲る天道虫
秋立つや浜に人影ちらほらと
高原やロマンに満つる星月夜
訪ひし床に一輪桔梗かな
子ら去りし浜の砂山秋の波

○ 矢口笑子

絵団扇の美女があひづち打ちにけり
美人画の紅のうけ口心太
恋仲のそれとしたる団扇かな
弁当を使ふ背中や蟬しぐれ
陰口は聞いて聞き捨て扇風機

○ 松山三千江

棚雲に残る力や梅雨夕焼
御輿の出待つ間のサンドイツチかな
御旅所に町の長老ひもすがら
店先で飲む甘酒や越の町
スコアボードカメラに収め夏終る

○ 赤羽陽子

雨やんで風の重たき大暑かな
片蔭をとぎれとぎれに拾ひゆく
さしかけて陰を手渡す日傘かな
かはほりや路地に子を呼ぶ母の声
十薬を束ねて掛けし深庇

○ 篠原幸子

梅雨長し物の貸し借りうやむやに
またひとつ夢の夢みて明易し
白靴やグラビア貢ぬけ来し子
福もがな願ひて放つ金亀虫
露草のひそやかな声聞きもらす

○ 藤原若菜

黙しゐるきみの眸の奥青嵐
睡蓮や旧家に遺る防空壕
苔庭をわたる琵琶の音沙羅の花
戦没の叔父の若さよてんと虫
校了の夕べあかるし敦の忌

○ 大文字孝一

手に青き匂ひ残して草を引く
瓶ビール遠き昔の艶話
屋号のみ残す老舗の団扇かな
風死せる街を抜けゆく救急車
海鳴りは亡き人の声魂送り

○ 神田恵琳

暮れ方の安房の晚鐘仏桑花
樹下涼し木椅子ひとつの停留所
黒揚羽みなもの静寂やぶりをり
烏瓜咲く観音の御手のごと
藤の実や机上のナイフ微光なす

○ 小山繁子

郭公やひかり膨らむ雨後の山
蟻の道往くももどるも振り向かず
木立抜け蟬時雨まだついてくる
瓜きざむ家の隅より暮れにけり
にはとりの風を見てゐる晩夏かな

余言

安立公彦

忽と襲ふ無音の世界明易き

諸戸せつ子

「無音の世界」は厳しい。「通信欄」によると、或る日突然聴覚が低下したとのこと。しかも両方の耳とも物音が消えたことある。難聴と言われているが、無音の世界は思っただけでも息が詰まる。通信欄には更に、「右目失明に加えて」とある。視界も不自由されているのだ。

この句「明易き」が善い。ここには無音の世界への嘆きは無い。それに代わり、△短夜のあけゆく水の匂かな 万太郎の詩情が浮かぶ。ご健在を願うばかりである。

巴里祭君銀髪となり給ふ

中村嵐楓子

「巴里祭」は七月十四日。フランス革命記念日の日本の呼称。パリ祭が歳時記に記載されたのは、昭和八年、ルネ・クレールの映画の邦訳「巴里祭」からとのこと。△汝が胸の谷間の汗や巴里祭 憲臺△の句がある。

掲出句、如何にも昭和の味わいがする。「君銀髪となり

給ふ」、正に昭和映画の一シーンだ。「君」は女性。最近中老以降の女性の銀髪が目につく。佳景だ。この「給ふ」が、先の引用句とは異なる優雅な趣を見せている。

古代蓮この香卑弥呼も嗅ぎしかな

柴崎甲武信

毎年夏になると、「古代蓮」の開花のニュースが、新聞やテレビを飾る。蓮はインドなどが原産とのこと。古くより中国大陸から渡来し、仏教との関わりも深いと言う。

この句、「卑弥呼」の登場で古代蓮が蘇り、悠久の歴史へと思いを馳せる。卑弥呼は周知の通り、三世紀頃の倭の強国邪馬台国の女王。その所在地には九州と畿内との両説がある。古代蓮の花の香りに焦点を絞ったのがみごとだ。なお、世界史年表には卑弥呼の記載もある。

知覧に舞ふ兵の化身の蛸かな

平野加代子

「知覧」は鹿児島県南部の地。第二次世界大戦では、この知覧に陸軍特別攻撃隊の出撃基地があり、幾多の若い航空兵がこの地を後にして、再び帰ることは無かった。それらの特攻機は、日本を離れる際、近くの開聞岳の上空を旋回して去ったと、子供の頃聞いた覚えがある。開聞岳は標高九二四米、古来「海門の山」と崇められて来た。

この句、作者は知覧に来て、折しも夜風に舞う「蛸」を

見ながら、そういう話を聞いたのだろう。戦後七四年、蚩に化身した「兵」への思いの残る句である。

ビヤホール斗酒尚辞せぬ匹夫の勇 廖 運藩

「斗酒尚辞せず」は、大酒を飲むことの慣用語。「匹夫の勇」は、思慮分別のない血気にはやる勇氣。小勇とも。こう書き並べると、無分別な若者の意と解釈されよう。しかし作者は現在九二歳、春燈台北句会の指導者であり、毎月航空便で届く出句は、誤字の無い言葉で書かれている。

この句、先に記した「無分別」の意があつたとしても、「斗酒尚辞せぬ匹夫の勇」は、それだけで固有の俳句表現となっている。一句を誦しながら情景が浮かんで来る。

水打つて夕暮の風呼びにけり 今井 弘雄

数多ある夏季の「生活季語」の中で、「打水」ほど私たちに身近な季節感を伴う季語は無い。庭先や道路に撒いた「打水」は、草木や路地をひと時熱気から開放し、その辺り一面の涼感を呼び戻す。

この句、「夕暮の風呼びにけり」が善い。まさに「呼びにけり」の打水だ。水を撒いた後の涼風は、クーラーの風とは異なる、天然自然の涼しさである。

蹲踞の水を離れず糸とんぼ 懸林喜代次

「蹲踞」は茶庭の手水鉢。よく見る景だ。今、その蹲踞の縁に糸蜻蛉が止まり、水面を浮遊している。「糸とんぼ」が善く生きている。作者の私意はどこにも見当たらない。それが読む側には一句を諾う表現となっている。

尚、通信欄に、先日京都アニメの大惨事の場所は、作者の家から一キロの所とある。弔問客未だ絶えず、とも。

殉教の島のミサの灯明易し 後藤真由美

「殉教の島」は五島列島、長崎市の北西にある島々だろう。此処には一四〇余の島があり、キリシタンの潜んだ地として良く知られている。近世日本では、キリシタン禁制の政策がとられ、キリスト教は日本統治体制に害悪を及ぼすとして排斥されて来た。その禁制が解かれたのは、一八七三年（明治六年）のことである。

日本に渡来した最初のイエズス会士は、スペインの貴族ザビエル。一五四九年（天文一八年）鹿兒島に上陸。その名を持つザビエル教会は、今も市の中央部に残っている。

この句、「ミサの灯」が、善く一句をまとめている。辞書を見ると、イエスの血と肉を象徴する葡萄酒とパンを信徒に分かつ儀式、とある。宗教は深遠だ。

当 月 集

安立 公彦選



○ 近藤 真啓

夏風邪に白湯一口の安堵かな

ひまはりや真砂女に負けぬ気概もて

夕虹を人待つひとと眺めをり

片木盛りの蕎麦のさざ波冷し酒

一言を胸に留め置き遠花火

○ 田 中 嘉 信

多摩川を望む台地や青嵐

木洩れ日を散らす川風濃紫陽花

草笛の遠き音色や夕茜

お台場のビルの煌めき梅雨晴間

俄かなる友の旅立ち沙羅の花

○ 宮 崎 紗 伎

西日中ガラスばかりのビルの街

裏庭の日照雨過ぎたる花南瓜

錠剤を三つ並ぶる夏の風邪

渋滞やバックミラーの大西日

八月の雨降る午後やものわずれ

○ 山 浦 紀 子

土砂降りのバケツを叩く沖縄忌

ひと日のみの鎌倉夫人夏館

バスの椅子弾ませ着くや夏至の海(ハワイ島三旬)

夏の椰子同じ高さに風かはす

ヨットの帆降ろし闇夜のマンタ待つ

○ 佐 藤 ま さ 子

海青く入道雲の絵画かな

軽鴨の子や道行く人の足を止め

蟻の列進路を変へて進みけり

真紅なるハイビスカスや父の日来

波乗りに興ずる若さ沖荒るる

春燈の句

安立 公彦選



清流のごとし魚ある金玉糖

東京 坂本依誌子

沈む日のまだ余力ある茄子畑

雨雲の奥のあをぞら秋近し

桃すする姉妹や目もて物を言ひ

望郷の味や木苺そつと噛み

遠き日のきのふのごとしかき氷

七月の水平線や九十九里

短夜の夢に父母帰り来る

料理本徴びぬ作者のサインより

乗り合はす青年僧や涼しげに

担ぎ手を急かす昼餉や夏祭

蟬鳴いてひとつ季節の進みけり

蟬時雨何処かで聞きし友の声

振りかへる度に思ひ出夕焼雲

神奈川 葦原 菫切

神奈川 辻 泰子

埼玉 大谷満智子

すれ違ふおはぐるとんぼ散歩道

鬼ひとつ増やす我が家の鬼やんま

前進の一步に夢を夏休み

水打てば寄り添うてくる白き蝶

清流に梅花藻咲くや川涼し（醒ヶ井脩）

いち早く咲きし桔梗を供花とせむ

静かなる涼気走るや名刀展

雨上がるや庭に溢るる蟬の声

大樹なる夏の櫂に心置く

睡蓮の清かな水面女神立つ

木々の葉のゆらめく水面舟涼し

朝もやに古代の色や蓮の花

向日葵や洋裁学校跡の空

夕暮や蜻蛉のうた口ずさむ

福井 西本 花音

広島 浅田セツ子

滋賀 馬場 節子